猪犬の頂点へ　新たなる地平を目指して④

田宮　治

「無事」、これこそが「名犬」

猪猟人が片時も忘れてはならないことは、どんな激戦であっても必ず愛犬たちを守り、無傷で完勝させることである。どんな大猪を獲ろうが、愛犬たちが怪我したり、最悪殺されたのでは、楽しむどころか、なんの意義もない。

戦い終わってしみじみと、「ああ、いい一戦だったなあ……」と喜び、真の幸福感を味わえるのは、犬たちの無事と全員の無事である。

私は常に猪犬が怪我のないのが何より大切で、「無事、これこそが名犬」であると思っている。目の明かない仔犬の時から一日も休まず、手塩にかけ苦労を重ね、やっと仕上げたかけがえのない犬たちである。殺された時の悔しさや、惨めさは犬持ちでなければ決して分かりはしないだろう。

できる猪猟人ならば、必ず一度や二度はそんな惨敗と涙の出る苦い体験を味わっているはずだ。

愛犬の受傷を自慢げに公言したり、猪犬は消耗物のような考え方では、猪猟人として褒められるものではない。

確かに猪犬は危険と隣り合わせである。極言するならば、猪犬は受傷するようになって、やっと一犬前である。

つまり、実戦で受傷しないということは、猪に相手にされない未熟な犬であるか、あるいは激戦を勝ち続け、すべてを乗り越えた超名犬級の犬たちのどちらかであるということになる。

私は当然のことながら、後者を記述して説明している。だから簡単に完勝とか、無傷でと言ってみても、どんな激戦でも完勝するには、仔犬の時から、そのことにこだわった必要な訓練をして、受傷したり、殺されないように仕上げることが大切なのである。

「そんなことはできないよ」と思われる猪猟人も多いかと思う。しかし、無傷での完勝を猪猟の目標にした名犬を仕上げるためには、日頃からそのことに集中して仔犬を作り上げなければ、とてもできる芸当ではない。

三秋を要する一流犬芸

私は、その一切を山彦会千葉支部で説明してきた。ただし、猪猟の要（かなめ）をなす猪犬作り、つまり、その作戦とか使役法は、言って分かるほど生やさしいことではない。どんなに説明しても、その㊙部分も含め、分かるはずはないと思っている。

肝心な猪犬は、私が三秋の挑戦で公開し、こだわって一秋ごとに仕上げた。十一頭作ったその犬群を使役することで、最高の猪猟がすんなりと体験できるように立案・設定してきた。

山彦会千葉支部の若者たちには、猪猟犬の心配は一切せずに、一流犬芸でなければ決して実践できない最高の猪猟を体験してもらう。そして、猪猟の成果に直結する大切な猟技術や、特に咬み止め犬群の見事な止め芸に対する攻め方を何度でも繰り返し実践してみることで、極限まで高めて確実に自分のものにしてもらいたい。

その中で、この猪猟法を心ゆくまで楽しみ、一番良いと納得し、これこそが、われわれの猪猟であるとの信念を持って、さらに高めて次世代に繋げていってほしい。

そんな思いで推し進めてきたこだわりの一秋は、どの戦いぶりも堂々たるもので、安心して見ていられるものになってきた。

特に今回のガチンコ勝負のように、猪が獲れたどの一戦でも、全犬さしたる怪我もなく、いつものように元気そのものであった。

犬群は思ったとおりの止め芸で、寄せ鳴きに始まり、見事な一直線の谷落としより小沢の始まる凹地で、必ずきちっと止め切る。

そこを三〇センチ～五メートルくらいの所からよく狙って撃てばいいのであるが、この攻め方がなかなかの曲者で、大変奥が深いのである。

この曲者ともいうべき、一流猪止め犬群による強烈な止め猪の攻め方と、撃ち込みは何度やっても難易度が高く、それだけに、見事にできれば心ときめく最高のものとなる。

しかし、猪止め犬群が作ってくれるどんなチャンスでも、きちっと刺し止めたり、素早く刺し止め撃ちで応えられるようになるまでには、さらに長い年月の訓練と血のにじむような努力が必要になってくる。そんな難事の激戦も、止め現場の主役、つまり犬群の止め芸さえしっかり出来上がっていれば、今回の一戦のとおりである。

基本的には、猪猟の主役である猪犬が立派に成長し完成するには、最短でも三秋を要する。

また、どのような一芸をもって猪猟を実行するかによっても、その仕上げ方は全く異なり、なかなか大変なのである。

私がここで言っておきたいことは、猪犬を作ってから、猪との一戦で勝とうというのであれば、一秋くらいでどうなる話ではない。

すべての点で、自信のあるぞっくり揃った一秋ごとの猪犬「三秋分」が、私のそばに付いている。この犬群はすべて公開し、仕上げてきた期待の犬たちであり、まだまだ伸び盛りの自慢できる仔犬たちばかりである。

私の存念は、猪猟は犬次第であるということである。

目的に応じた使役法

毎日の訓練はいうに及ばず、実戦で猪を撃ち獲ることを重ねて鍛え上げ、磨き抜き、その犬たちの止めた猪は必ず撃って共に喜んできたからこそ、ヨシ号たちだって、今日の芸域まで上り詰め、素晴らしい成長をしてくれたのだ。

寝屋を抜け出し移動逃走中のこんなグレ猪（一二〇キロ）を、なんと五〇メートルも走らせずに、見事な一直線の谷落としから小沢の始まる山の中腹の凹地できちっと止め切ったのである。

私は誰がなんと言おうが、われわれの信じる猪猟道に則り、仔犬を作り育てて、猪猟を思いどおりに実践できるようような名猪犬群に仕上げてきたのである。その大切な犬群の使役法でも、犬たちが猪と対戦して、無傷で完勝できる頭数を考えて掛けるだけのことである。

五頭で七〇キロの猪を突き撃ちしようが、三頭の犬たちで今回のように一二〇キロの猪に完勝しようが、その時々の目的に応じて、的確に使役しているだけのことで、なんの問題もないと思っている。

それもこれも、できる猪猟人ならば、自分の信じる猪猟道は必ず持っていると思うし、真の猪猟人ならば、この道理も十分理解していただけると思っている。

猪犬の理想は一頭で猪を止めることだとか、はたまた二頭でないと駄目だとか、あるいは六頭も犬を掛ければ猫のような犬たちでも猪は止まる、というような全く論外なことを言う人がいる。

たかが猪猟、されど猪猟である。猪犬一頭仕上げるのであっても、最後までやり抜き、その成果を人様に知っていただく。そして後世まで広めていきたいと思ったら、生半可な覚悟でできる話ではない。

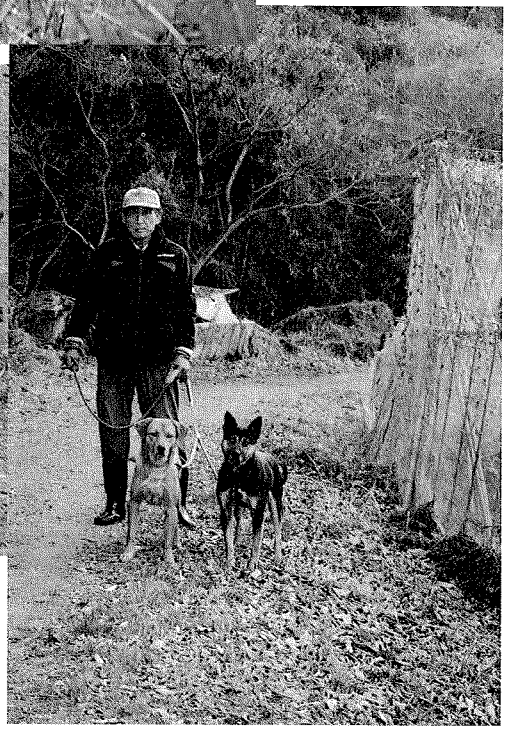
繰り返すようだが、猪猟の主役は犬である。その要となる犬たちを、毎日欠かさず訓練し、山での実戦では思いどおりの猪猟ができる一流芸に仕上げておく。そうでなければ、自分でも納得できるとか、猟友に喜んでいただけるとか、ましてや人様に教えてやって共に楽しむなどは、決してできないことなのである。

しかも山での実戦は、何が起こ

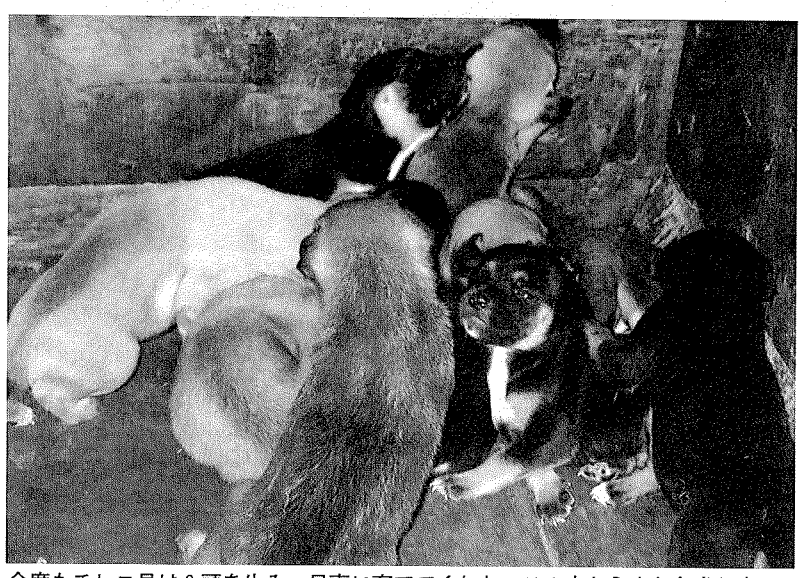
千葉の山は年中、青藪で、止め犬での勝負は至難である。そのうえ見かけによらず谷はV字に落ちていてきつい。犬たちが一流芸でないと、まず猪は止まらないし、無傷で完勝とはいかない

この凄まじい猪の谷落としは、犬たちも猪も小川にはまって泥まみれだ。この猪もこの場で20センチでの刺し止め撃ちだった（牝75キロ）

シロ号と武蔵号。猪犬は猪に寄るその時だけ主人と離れるのがポイント



どんなにできた一軍犬でも、毎日欠かさず綱で確かめること。実戦以上の成果がある（マロ号とヨシ号）



今度もチヒロ号は9頭を生み、見事に育ててくれた。この中からまた名犬が出て、このツルの確かさをきっと証明してくれるはずである

るか分からない。愛犬たちの怪我や万一に備えて、いつでも使える不動の戦力に一流犬群が必要になるのである。

素人集団がわずか一秋で

そんな一流犬群を、一猟期で見事に仕上げるのも、一流猪猟人の大切な仕事であり、重要な案件となるのである。

つまり、猪猟の要である猪犬作りは、何度でも繰り返し挑戦し、上り続けることが、「猪犬の頂点」への大事な近道を知ることであり、最高の猪犬を作る進化に繋がる重要なことなのである。

人それぞれで、様々な意見もあると思うが、私はそんな猪犬とともに上る猪猟の頂点を記述したかったのである。

今まさに山彦会千葉支部では、その八合目辺りにたどり着いたようだ。一秋の成果としては実に立派なもので、まさに目標に向かって猪猟道の近道を突っ走っているところである。

それもこれも、私が長い年月をかけて試行錯誤を繰り返してやっと知り得た猪猟の頂点までの道程を、わずか一秋で上るという無謀なまでの挑戦であった。

想えば一年前の山彦会千葉支部は、何もかもが駄目づくしで、全くの素人集団だった。その集団が私の描いた独断先行の猪猟道に則り、猪猟の頂点を極めようというのである。

当然、猪猟において理想の頂点を目指すからには、今までの猪猟をがらりと変えるものにしたい。

つまり、旧態依然の猪猟に、大きな風穴を開け、「辛くて、苦しい猪猟」から「簡単で、楽しい猪猟」に、というような進化・改良の新風を送り込み、誰でもが楽しみ、親しめる猪猟道を構築したかったのである。

私は常に良いもの、また必要でなくてはならないものでなければ、生き残れないと思っている。

目下の狩猟界は、老人が中心になってしまった。以前は、約五〇万人もいた狩猟人口が、今年はついに約八万人にまで激減している。このことは残念でならない。さらに今後一年ごとに五千人ずつ減り続けるという予測もある。

こういう危機的状況の中、私にいったい何ができるかを考えた時、自信を持って人様にお勧めできることは、猪猟法と見事に仕上げた猪犬群である。

なんとか自分がこうした得意の猪猟を押し出すことで、辞めようと考えている人たちに対して、一人でもこの楽しい猪猟の中に止め置きたい、そんな思いで頑張って

パフォーマンスパピー
15kg6000円 7.5kg3400円
ドッグフード1袋が全猟を支えます
ドッグフードのご注文は全猟へ！

いるところである。

残された狩猟人の道

今、われわれ猟人が置かれている立場は、大変厳しい状況にある。三年ごとに巡ってくる銃の更新ひとつとっても、その法的規制が強化され続け、まさに「辞めてしまえ」と言わんばかりである。

確かに銃は危険なものであるが、かといって提出する書類が多く、おまけに更新日が誕生日の二カ月前から一カ月前までになっている。私の場合、誕生日が三月十日、更新日が猟期の真っ最中であることから、なおさら特別な苦労を感じるのかもしれない。せめて誕生日までとしてもらえないだろうか。

例えば、同じ公安委員会が管轄している自動車運転免許（誕生日の一カ月前から誕生日まで）と同じように……。そうでなければ、「誕生日に忘れないように……」という意味がないのではないか。

犬舎の規制、狩猟そのものの規制……等々で、今や猟人は雁字搦めで、身動きできない状態であり、行く先の夢も希望もあったものではない。かといって、こんな法的措置に対して立ち向かってみたところで、私一人の力ではどうにもならない。

要するに出口の見えない袋小路に入り込んでおり、どの問題ひとつ取り上げても、解決の糸口が見いだせない。まさに猟人の置かれているのは、存亡を懸けた危機的状況の中にある。

そんな中での起死回生の妙手があるわけでもなく、種々の規則緩和などについては、猟人の総意をなんとか結集して、猟友会や全猟などから働きかけてもらうしかないと思っている。

しかし現実問題として、そんな他人頼みの考え方だけではなく、猟人一人ひとりが自ら持っている得意なものを押し出し、そのことを梃に、まずもって狩猟界をもっと楽しい、魅力あるものにしていく以外ないだろう。

その手段のひとつが私の作った犬たちであったり、私が押し進めている猪猟道、そして激戦でも難なく完勝できる攻防術などである。これをなんとか次世代の若者たちに伝えているところである。

しかし、そう簡単に猪猟の概念を変えたり、狩猟人口減少の歯止めになったり、伝えたい存念でさえも、なかなか理解してもらえないようである。

幸いなことに、現在では大物猟ほど、行く先々でとても喜ばれることはない。農家の人たちは、私たち猟人を待ちわび、猪が獲れれば一緒に大喜びしてくれる。

誰がなんと言おうと、どんなに規制が厳しかろうと、われわれが信じる猪猟道をどんどん押し広めていきたい。

そして、猪猟に大穴を開け、根こそぎ進化・改革する覚悟で踏ん張り通さないことには、この立派な狩猟道を守り切れることができないと思っている。

鳥猟人は鳥猟の面白さ、猪猟人は猪猟の楽しさを目いっぱい広めていく。そのためには、一人ひとりが目の前にある難題に対して他人頼みではなく、得意分野での技術力を駆使してもらいたい。そして、自らの強い信念ではね除け、切り開いて、一人でも多くの仲間を増やし、後継者を育てて狩猟の輪を広げてほしい。

私はそんなことを考えて、好きでやってきた気楽な単独猟を控えてまで、若者たちと猪猟の楽しい和を作り、頑張っている。

残り少なくなってしまった狩猟人生の最後の奉仕として、素晴らしい後継者を育てることが何よりも大切なことと思って、日夜頑張っている。

今では、自分にできる最高の猪猟技術も、この見事な犬たちの一芸、そしてやり抜く執念や、感謝の気持ちまでもすべてをそっくり受け継いで、明日に繋げられるように全力で指導していきたい。

山彦千葉支部の若者たちには、二秋ぐらいで頂点に必ず立ち、もっと立派に確立した猪猟道をさらに育て広めて守り通していただきたい。私はそんな思いで、これからの猪猟道の灯火であったり道標であり続けたい。そんな大きな夢を見ているところである。

（つづく）